電波新聞

2023年(令和5年)6月7日(水曜日)

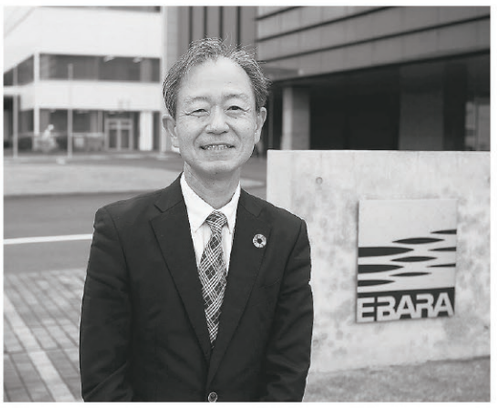
荏原製作所精密・電子事業カンパニー 事業戦略と展望

蓬臺 昌夫 執行役事業統括責任者カンパニーCOOに聞く

荏原製作所の2023年12月期第1四半期(1～3月)は売上収益、営業利益などが第1四半期として過去最高を更新した。売り上げの約3割を占めるのは、ウエハー表面を研磨する「CMP」やドライ真空ポンプなど半導体製造で用いる装置や機器を手掛ける「精密・電子事業カンパニー」だ。半導体需要の落ち込みによる設備投資の縮小や投資計画延期の影響が表れているが、中長期的にはさらなる拡大基調を見込む。蓬臺昌夫執行役事業統括責任者カンパニーCOO(最高執行責任者)に戦略と展望を聞いた。

◇

―カンパニーの概況はいかがでしょう。



蓬臺執行役事業統括責任者兼カンパニーCOO

半導体装置事業を強化

CMPとドライポンプ シェア1位目指す

蓬臺氏　CMPを主とする装置系、ドライ真空ポンプ、排ガス処理装置中心のコンポーネント系という二つの製品群で展開する。ここ数年、右肩上がりの業績が続いてきたが、CMP、コンポーネント共に市場減速の影響を受け、精密・電子事業の通期見通しは下方修正を行った。

―半導体製造装置市場の見通しは。

蓬臺執行役事業統括責任者兼カンパニーCOO

需要回復ずれ込む

蓬臺氏　半導体実需の回復見通しがずれ込んでいる。一部の最先端や自動車向けといった活況な分野は別として、主要な顧客の工場稼働率も低調な状態が続いている。価格が下げ止まらないメモリーも減産状態だ。

ただ、5月下旬くらいから「半導体の最終ユーザーの在庫レベルが通常状態に戻りつつある」との見方も出始め、見通しづらいが「悲観一辺倒でもなさそう」というのが直近の肌感覚だ。

―御社の優位性はどこにありますか。

蓬臺氏　CMPでは豊富な装置ラインアップを持つ競合に対し、当社はシングルユニットメーカー。顧客の望む性能の実現に向け、集中して(開発の)リソースを投入できる強みがある。単位面積当たりのウエハー処理能力でいえば、タングステンや銅などメタル系のプロセスで比較的強みを持つ。技術力向上に向け、ベルギーの先端技術研究所imecとも協業を進めている。

ドライ真空ポンプはプレーヤーが多く、競争が激しい。省エネ性や排気性能のほか、腐食性ガスなどを扱う過程では構造的な耐久性も当社製の特長だ。真空ポンプは定期的なメンテナンスが特に必要で、ローカルの拠点は、ほぼ全てにオーバーホールの工場を併設し、手厚いサービス体制を敷いている。

太陽電池向けなど中国市場が大きくなってきており、半導体以外の一般産業向けポンプにも注力。近年は分析精度向上を目的に電子顕微鏡や検査機器向けのドライポンプ需要が増加している。

―海外市場は。

中国の成長余地大

蓬臺氏　中国市場の成長余地は大きい。経済安全保障上の法令順守を十分に行った上で、補助金など政府の支援がある中小規模事業者のビジネスは活況なのでしっかり取り込んでいく。欧州の自動車産業もポンプ、CMP共に好調だ。CMPは特に8㌢向けの需要が多い。SiC(炭化ケイ素)などのパワー系も増えている。

韓国と台湾以外にも東南アジアを強化。4月、シンガポールに次ぐ2カ所目のローカルサポートオフィスをマレーシアに設けた。海外半導体メーカーが拠点を構える動きに合わせた格好だ。

―カンパニーの展望をお願いします。

蓬臺氏　IoTやクラウド、AI(人工知能)、自動運転、5Gや6Gなどの進展が続き、AIチップも加速。中長期的には成長産業と捉え、30年に向け市場成長を上回る成長を目指している。CMPとドライ真空ポンポのいずれも市場シェア1位を狙いたい。

装置事業を強化するため、藤沢事業所(神奈川県藤沢市)に開発棟を、熊本事業所(熊本県南関町)に生産棟を新設する。東北にはドライ真空ポンプのオーバーホール工場(福島県伊達市)を設立。海外でも1月、米アリゾナ州にサポート拠点を設けた。今後も業界の成長に追随するための積極的な投資を進めていく。